

1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

中村俊定文庫
文庫 18
1006
13

接

寢衣集

七部注解
百川

七部集注解
猿以象集





續集之解



御宿の集化す事古今の物語の如りて
わざとくよせりれ

是處所せ古今の風氣に捺
せらる集とし今にさゞ古ノ街ハツラすとまえ
おきてがまきいゆすとまえて道達す時ハタモト
一書、是の集とすぬをかよ大意を、本木の間に
ゆくとおはねのひづきもせまよ
クも済す馬鹿もおきてうそとまつめり

幻術の才すとま況句よりれハ善てゆめ

是百般事に於て相應中の要法といつ語る
ナリ。勿御は虚妄と曰ふ。天地山川も變化
するの徳より勿字取る。是れゆゑに
あまの御事のまゝにて祀のへりと

久世の傳承を承りて不妄の言を
考へしときの意を却され。而して久世の傳承
を考へしときの意を却され。而して久世の傳承
の用を却は虛妄の人のよりへ。且
様義を盡す。久世の要法を

付之アリ

立德

立德云々又ハ心と云ふて是なり。

立德行は以て眞良恭謹慎といア

立德の爲の立德を以て行儀礼智作成す

徳の爲の立徳の理を立石は眞良恭謹慎も

仁義禮智信の行と徳を立石と見也

立石の行を立石と見也。故に却い成也

立石の行を立石と見也。故に却い成也

彼面行上人の骨董を立石が「立石」の名前

を立石に付して下れり。今立石

侍とも立つてのうれしかり及魂のは墨

もくもく

骨根其物より生まざれて脊骨のねに
さんと皮肉を以て骨肉の連絡相て
そぞう人の姿には似てよきものむ
くらうがよしも経筋のあひとまも
くもゆうむすびにやいがいよもかくもきりよばせ
まくらは計を」なれば、骨根の通ひ
もくらはるすとすとすと筋肉を仕
よあひてせゆまへ酒あま／舞あま／舞あま／仕
ひゆま／小ゑ魂の御行りあま／侍まで、

骨の骨肉化する人の身に立まむかぬ人
も「玉魂のほの思ひよるは道の筋肉
の是を主と脣脹」とてふらめ歌

きく魂のアリ／アイウエヨ能写てソリ
じ少都もあぬ／「此能作よ魂の入とてよ
こを連あぬり御のいにゆみゆ／「山中は樓
小ゑ書をえて能作よ神をひらひるは
相よ小ゑ力と出立事、能作りてりと
する能作よ相よ能をゆみて能作よ能作盡
一ノれ／是れのへたもと能作のまゝ
まは能作のめをくわむわだす

忽歎鴨の心の仕事もいりにひよ多々の初納

そのの初納は了達の邊北移と作
多佐和也とへ冥幻納して云妙深遠之
行幸の事は事を以て是行は也

多佐和也

且つえども立事と仰りて相善とは名
ナリト古事記序も立事とて現る
セテ立事凡地のり立事とて仰きて書
立事語立事の事く立事とての立事
立事與立事の事く立事とての立事

立事とて

晋其角

晋其角の室井の定音高音

医者附の事

通

物一くれ物もやう春よりりて
うきは 河ぬ伊豆の木の行こと其角之う樹の前には
かくれのすそをたまふ事無む根も葉も落れ日がく
森の宿のすす神を入浴す 河ぬの里に

われすとゆるあらわの経のが

是又河ぬの魂の経のよひてすす神をめぐらす
あさるのにてせんわきの河ぬの里

時ああら井戸水を瓶

千那

「河水のすすめりて 河ぬの水のゆく
いのまへ」

人へ時ひけぬ 河ぬの物 たま
河ぬのち移とくよしの神をすくゆの物

彦摩和也

史邦

河ぬのすすめりて 大工の主とて河ぬをもひて
立候

舟へよめひてあひゆの處

高右

ゆふをいたまひて立候とて河ぬ

馬へて竹のさるひゆの日

山城の本村の里馬を行ひても見ゆ

やうめりて 河ぬの河ぬをまつりて

神事あらう御子の事

御事あらう御子の事
御事あらう御子の事
御事あらう御子の事
御事あらう御子の事

タマシ

茶なる物をくすり善惡め

傳灯錄曰ヨチ鬼女常裂下澤^{スイノウ}斂^{ラツ}壹以供朝夕庵居士
ヨチ鬼女ハ又多作^{スル}禪^{スル}外^{スル}入^{スル}列^{スル}を観^{スル}婦^{トモ}を
此向^{スル}ニ^シ茶の行^{スル}御^{スル}茶^ハ漫^{スル}す^テト^シモ^ト人の觀^{スル}
所^{トモ}も^ト能^ス不^可言^ス教^スリ

ヨチ鬼女ハ又多作^{スル}禪^{スル}外^{スル}入^{スル}列^{スル}を観^{スル}婦^{トモ}を
是^シ鬼^{トモ}鳴^{スル}人^ハ其^ノ鬼^{トモ}も^トひ^ハ人^ハ皆^モ也

茶比^{スル}句也

脛^{スル}妙^{アリ}一^ム毒^相

赤^袖々^セ相^の付^ス之^ム 神代毒飯^の事^ニ

座敷の心^{トモ}り^ス海^底也

乃^シ事^トよ^リて^ス其^ノ事^ト也^ス下^トと^シか^シか^シ也^ス
乃^シ事^トよ^リて^ス其^ノ事^ト也^ス下^トと^シか^シか^シ也^ス 松葉底^の也^ス也^ス

き^シ口^トの^ス入^スま^スと^シう^シべ^ス

だ^ま

秀^シ也^スと^シに^ス其^ノ事^ト也^スて^スと^シの^スて^ス
入^スよ^リか^シせ^テロ^シく^ス人^の也^ス

冬日^の節^ヤ浦^の才^クれに^ス御^ス

魚肉を食す事無く國教會の油アラシ
モトナリ 挿入で出る余程あ
金車両ハ此を以て御湖水のアーヴア入室ヒテ山の林ヒ
ハ禪ヒアリと稱ハシム

山車アヤシムミテ冬の月

精進祭の三日角立と是のアヤシ物持て冬の月
其の月も如候アリ 亂自角アシムカハシムウタモ
ナリ トシタマニシナキ事アヤシムアリハシムウタモ
前田角アシムカハシムウタモルモセトリ冬の月ニシマセ
入幕アシムカハシムウタモルモセトリ形制アリ

13 年極度改め(集)

殊窟ノ異ナラ敷バ

殊アリトモ重ヘアリナム

・あらかじや神心のせぬ事アリ

佐野川村山家モニセラミ神事モツムテ外ノ事モ
余フヨリ皆善よ神モトウム

アリミナシ空也の神モ空ノ角

並多御師口の壁モアリモ數腸モモロモ
又ち曰空也 空體アリテ主事の歎モアリ

空あひ候りもとてすが空さけうる空中の
善倉もよき牛のてはい五事も被つより互照
の格を壹へ

毛鳥足も比較し空也の候りと空體と比合なし
もよき空也と相性の空體と比合ハ御遺のあうる

人馬を買ひてふい年也と

はまくゆの身を缺

鶴鳴川同様も其のみある

せよせよいりまのうじよ

まち法はあつゆを解れ

伊智

多那は乞食取引はれとぞねきてあひ能つもあね
ト佐見人
行きと食候のすこ

當てり年のはれや経月

年邊の事^リほ人の用を取

野と接と約にしやよる観
形に取るはめのひせは古歌とくらべ
はまづきを井口とねり町を駄引ひもとまくらべ
これ形とあ境て以て

甚上風物ノ社名今集よりも之日本時代の名媛にして

初之絃ニ神化の一人也

東州唐生和爾 ち鶴 小至と應

松高山の高鶴とやまと銀

玄蕃の白鶴事の源 宮本の御子と玄蕃
鶴もすまく二鶴の御子とよも御子と人跡
けりとまつてソノ而きむ行得す法ありとそ
あま様とまんなりてヨリと置りされ小至と
てやまと銀と也

花折よ御 うきよめよ

母尊了 おほきと碑ありの水ノ橋付處

名前

牛のものちかくは ほよびの處

古聞秀吉の宮廬

豊國の神 お度寺の院

牛のものちかくは ほよびの處

牛のものちかくは ほよびの處

牛のものちかくは ほよびの處

娘 おやとうおとおとけの日

お見合ひをもすと妻を済津とのてふと

昭和時へうりをかくてもかきながきな御子の處

也おもひたるおとせ根に強きの川をもて今ハ有

メル

馬の代に草薙を手に渴了
内原は隨分氣氛の作付四月
女の事の如く渴と云ふ事
極意物。此處の如きは空と云ふ事
極意物。此處の如きは空と云ふ事

卷之三

おのれの身の事
うらやましの身の事
うらやましの身の事

新嘉坡
南洋
華人
聚居
地點

燭牛角之毛よほは鹿
の

卷之三

踰伏尸數萬逐之旬有五而及

牛の角の骨のつても因と争ひて偶々也

卷之三

卷之三

主事はせわしく細々とお詫びを申せり
と云ふ事は前より御存知の事であつた
さうの如也

五日
癸未
正月
己未
庚申

葵はりはゆるく
けぞる五月の花の
いづれ

肩綱
十
傳
之
五
九

肩をすくめにした
横の馬のやうな
剣の光と
雪の白い板の
具そひ花の形よ
山のふれ肩拂はまへ

空津多かひづれりゆゑのす
高はとまくむ室つゝ既のとまく

あやゆくもよの母もぬの心ひ

五峰山山より信ふるに

ゆくりゆく今もやうしるほん

まの母もあそまく

りは黒醫の店う 蟻ウニカ う

えは吉福もく 壇の都

口の周市庄へきて墨子牛の舌
山城守源京と麻の花一百塚の西

そゆんこの御吹風を異うじ

そゆんこひうらはとて幕をまく

二人の少神も今や古風干

そゆん吹干よがまうじ時と風をほりとけ道り
はたらひうてと風アセおうせと風吹きて高人
の手拂ひと風も吹きアセと潤もひと

そぞくくいあはる風を哉

空津とてよむ想ひ教経の時教るのゆけ窮るよも
のゆけひへねまゆゆくとてやうござくくよと
清へりとちあひとてよもゆるさうせと移れ
て別ひとくへ入集せん

日絆や四の家の藤原
月絆の櫻をうかぐるをす昇る月やだいだれ

夕暮れむちびくやまの峰

山の木山をもとえと遠

人よかて相もよし組松風
義の少喜をうつたれ松引く

よき柳わきてゆきの檜
檜衣のまとは晴れの秋

日暮とすと卯と卯

あつともすがへり花

日暮は長崎あるの峰と都七は三重の候よ

かづらねとみぬ白の神社の宮ゆうて室を

美しきの甲冑のまれとまくすとまくまく

舞

もくやり甲の下ね

舞

多田の神社ハ物と加和小松宿とて

あのと場所は事ハ哉あらぬたるま

十町とくわらわらの森村の音

こり月の夜の舞のうさばかく

もくやうはまうくれて海をまく三月の
舞にそよ舞

一説 てこせとまく山後より

日ちかく野のうとす砂の上

草引の通人無事宿の多きよ六十人
建室住生のれもあらへり
義澤山治淨寺二世他院丈一作他院丈一
上人鬼比野神^{スカ}泥濘とかまひさて社に止
まつて下と高瀬人^{スカ}りて布履も云被ひ砂を
うるす日ちかく

相原の社ハ御名の行社也

あやまつてさむじゆくの鰐也

カニガ

和漢三石國書曰鱈絲魚形色似鯛而口圓其尾有小波
有者以鳴蛙人捕之哀聲如立絕之言

又似波^シ曰

崔氏食經鱈音害和名曰知加布里似鮓而有

黑点也

毛根^{シナリ}俗呼魚駄^{シタカ}也^{シタカ}此魚^{シタカ}計^{シタカ}一

身^{シタカ}痛^{シタカ}一

鰐の身の少^{シタカ}の鳴^{シタカ}事

花山僧^{シタカ}の^{シタカ}事^{シタカ}多^{シタカ}送^{シタカ}りんやの^{シタカ}福^{シタカ}アラ

一つアヤシム事^{シタカ}ナキ事^{シタカ}牧^{シタカ}行^{シタカ}板尾^{シタカ}政^{シタカ}基^{シタカ}

アヤシム事^{シタカ}ナキ事^{シタカ}牧^{シタカ}行^{シタカ}板尾^{シタカ}政^{シタカ}基^{シタカ}

之 番號日 三月五日

大三日

主ひ秋の夕や風の日

病満滿日風痕形一名病痛人皮膚虛座為
風寒所折磨也和名加佐保呂之

鰯魚の尾ノ木さきの秋の暮

晴子良とのすゆ

梅紅

信山山中之多喜神社ノ神既と作多喜之
伊勢神宮内に多喜御子ヒ御子神家二千八百行
て主底の神闇ノ子信

坂士佛 本神事多喜の經

主ひ之を御移ひてより更婦の足病をぬ治
主向多角之石付乎斗ノ神事多喜神社ノ九
年主も月の半實多喜方のみを主さりノ則
御と絆と

之やキ一匹の多喜神

御病の主は多角あらのアマリモトトシニテ
坐り風吹多角をわねとアヤセ
空はくに四脚も被はぬ御多喜神事主の多
やつれて思ひ立たぬあらうとせりとつえ

駒の馬よ子供無り柳井

アラシモトタミヤクホウセイセキモト

一里之隔猶如隔年
之久

と雲ひ代をよみの「多様」を
情じて少引ひやうの「死」
死はるを「死」の「死」
死はるを「死」の「死」
死はるを「死」の「死」

うの室
志の朝

卷之三

卷之三

亂世之志の如き
花瓶

「ほあひのやまとひそせの画
きもとあまの妙
まくはいふすみ
あて山よしむら
こすむをねぬ

桺
年
之
花
多
矣

酒風元年
の街中

樞戶所坎轉而開閉也。字彙曰：戶軸也。

中興之時，
國事日非。
朝廷之臣，
多失其職。
雖有忠信，
不能盡用。
所以爲國，
日漸危殆。

おもての
おもての
おもての
おもての
おもての

陳氏傳記
卷之二

多事者多矣
故人之死也
吾心之悲也
不以爲過
惟是吾子之
死也吾心之
悲也非特過
於吾友之死
也亦過於吾
友之死也

つるの本の常都

武人白刃の間を、まゝ眼
見ぬ人の通り抜けたる者
の官門を行ふと、元は
其の腰一帯
のやうな、さういふ腰

5
ひきのまゝよめあよ 四季竹

秋行の終る鴨川に川並て

橋をもとまし流るるのう

凡此
事邦

役行す川筋とれど於ち鴨川と爲す枚形の
はこを川口と終るのくと
旅の行風とそんに橋をもとまし流るる
う橋妙と詠歌を以て

まくら戸よ暮れとがく宵の内

人まくまきと名わゆるよ

東

桜戸よ山みの御もと東方すももつる。既

まくらよ夜の櫻戸よ鹿戸よ山みの御もと東方すももつる。既

もと匂れぬ

つまよ雪あ櫻戸の御よ埋結むと萬葉すとと
されくわくよ山樹も利もむかうねやうととく

事ノくらまき傳ゆつて 秋音て

邦

幕ノおの聲よ是がよまきす 桜戸もまた
桜もまた絶ひちよ人のまきと萬葉傳ゆつて
秋音と秋妙と

もくら心よめりやむの日本

丸

うりやまく葉敷すとちくえむ紙生む人のまき

萬葉傳ゆつて秋音と秋妙と

蒙古語
卷之二

丁

丁巳年夏
王國維

卷之三

一説ちゆうの山代年のいに紫野行ありを云ふ
こ又山代年のいに紫野行ありを云ふ
奇々今やまた年代のいに紫野行ありを云ふ

まよの源はのちうるゝを京極のな
ミナヤ御子達
さまであるこせきわざなりはしご後まつり
之れにてまほらとあくす

乃
村
先生
手
記
水
原
守

卷之三

まくはりてはゆゑにゆき
まくはりてはゆゑにゆき

卷之三

先づは、御用事にてお仕りのうへ
ぢやねえがんばる事あるまい

山東毛澤回
之印

卷之三

高麗の事と考へ人情眞實を以て其の集めを定め
其の多才なる人を窟向くに之たる所が爲り
道のアリノ人ト云ふ者、往々子孫の姓を傳へ
考究室門前風の事案人のアリと云ふ事の如

九月晦日曉春

九

足を廻らぬの接觸さへも解せぬ
まことにうけて腰と筋

「あは向の川もか
花をまく水汗
木村の音うるさく水汗の音り
れの音とまくねりうるさく水汗の音り

獨
處
身
之
樂
也

卷

三

萬葉不つて、風のや風

邦

まうゆりて、はよ多種叶ひに佳妙之

小草に、言ひてたゞすのち、直

皆各經理些都事歩ひまよ也

時事を、傳ひまわ

也

是於而く、かの様く、おのの五事、一その
調子聲の物と、一の事物と、能生は、御方格

別

禮骨のやす、歌をさむ力

邦

音の力、もと、歌をさむ力、もと、常をまくもと、ま

音の力、もと、歌をさむ力、もと、常をまくもと、ま

謡と、りて、車、一、しも

也

酒代、と、魚、と、達、と、も、ま、一、や、て、な、往、ま、る、
り、る、ま、る、の、よ、移、(こ)、も、行、ぬ、や、す、な、
と、い、か、ま、き、ち、ほ、た、ら、ぬ、よ、ま、で、や、こ、ま、ナ、
川、の、移、

山林と、木、と、木、と、木、と、木、と、木、と、木、と、木、
の、移、し、動、と、か、う、が、か、と、通、か、か、だ、ま、ア、
う、ま、人、と、木、林、移、と、か、う、そ、

森

車、代、と、達、と、達、と、達、と、達、と、達、と、達、と、達、

也

増とくる人の様に前後の物乞うる事
つまへる事の多くて之の故に

さきつけよ梯てひきの門

北

利口の事はせばまことにあつて
そりよなつて聲がさうとたま義

實め核をもつて

邦

自の身をさうとて今聲をうちて、空をも
取らざる人のかくとて

まことまこと月のわたりけ

東

御水の木の吹きの酒

翁

歌麿を以てゆるれうりとゆく句なせ
る章をよく有する句の仕事めこゑを調え
主むじゆ

御水の木の吹き酒と西を及牛と御あるつ語
ふとくとくに

邦

坐すや萬葉音を歌て歌を詠

立すてて一句また無一付御歌を序て音を
詠すと云ふ事も多し管されての御歌也

か

著文集に清風修歌是付管され
つ歎美すい

か

望人を長崎ゆゑ見だりむ

三日とまゝ行ひてさうり

主に修業保ぬとて又望み

而るえ風の夕景

押立在はる沙花

たしのきのままあきら

かほ望みまくとよとめり主なとこ

而立主なむおとて押立在はる沙花

次ノ多良山のやのれをこむ行方々

一ノ梅歎つゝ宿の江水

松やのちやくもすすむ

主に望みまくとよとめりの神

作心

市中ハナリトモリヤ暮ノ月

火水

黒リとワの月

義

市中鳥賀松見し鷺々今世の化を笑ひ走
はゆる五日月夜の向に向に笑ひ死匂
立七日月桂も松見し魂

まほ月と年齋

既

船とキタ洋多向牛の里を押出市中まつこ
まく匂ひよ是より沙子浴室の脇

ニナリモとも思ひし梅雨

三月

一月半だくくまも そ枝
外ニ里家の神もアツテのうつて神と外
かゝ御神をたれまく御堂門でくまく神
とぞとぞみ

四句のうつてはアツテの神の巻きの神巫子
アツテの御堂

シ翁も紀も乃ち人を有ゆるよ

久

津ドリタレシヨウ多ヒ形矣

未

シ翁の御堂門人ねの神と人をもじり
人を御堂門人

以ハ族の御堂門人ねの神と人をもじり

もまことに御の如なりとゆう

まことに性とてタヌミ

蟲の若とてには蛇印

山
通

あ章巻形を以ては法句の形と形態も一
向けの形活用の形態も巻形の人の形體せし
ときは形態は法句の形態の形態の形態の形
も之にあらかじめは法句の形態の形態の形
はむれども是れは法句の形態の形態の形

道心のゆきはなるつもし

本

能やの巻形のそりは

そのの形をもよおひ章とての巻形の例の活用
あるす形は形とて形化して巻形の形とて形
とて形とて

きの行うとては水原の姿とては源治中
主は清少納言とては

魚の骨を手てさしおたとて

通

侍人よ 小山門の徒

魚の行うとては水原の姿とては源治中
もすよは一の見事也是の見事をばくと
魚の骨を手てさしおたとて

魚の骨を手てさしおたとて

待人ノリカラツの縫とソリ是油又萬物在の付
計次外に書作事事レアノア章縫の縫とスミ
古流、源作田今ノ御管事物事田ノリ御事日
田モ一書ニ一二向いヨリノ一花義の侍人首し古
つ縫と縫を縫ひ集核時粒やの向い代入
テテト事務は縫のあつ子事もれは而のシテ
ミヤウタタタタ

立カリリ屋風を倒もゆす

湯殿ハ竹の室の室也

主御屋内は御内は主御内は主御内

セミモモの御内主御内主御内主御内
湯殿ハ主御の内屋風倒も主御の内屋風
主御内主御内主御内主御内主御内主御内
御内主御内主御内主御内主御内主御内

皆内主御内主御内主御内主御内主御内
主御内主御内主御内主御内主御内主御内
主御内主御内主御内主御内主御内主御内
主御内主御内主御内主御内主御内主御内

荀香の室主御内主御内主御内

修や、主御内主御内主御内

湯殿の主御内主御内主御内主御内主御内
主御内主御内主御内主御内主御内主御内

猿川の想せをすすめ秋つ月

最

「年に正月の夜よ斗とえ

年

猿川と比き何と幸くゆもとす人には住ま
あやめに住む神猿川へやまと世話相ひうそ
辛苦是別苦樂の以生」

又唐詩選：猿馬帶禽歸。少^シタ秀の聲のも

年正月中の地すけは猿川の聲の聲

五つふ生來づけり。清

れ

黒猿やうにけに黒石このを

れ

始よりは田舎の神すて田畠なりとぞ

思ふるよの音とはあらんかあこゑたまうのうきこ

坐てきてもるみの馬の口持

れ

丁度前ふ水こく

れ

墨筆端行きハ口持西く。色深之十種ハさへ一室

あくともひのり極よどきの御了」

一設正句無の事はきを奈の事とてゆきを

今のがまの事は

戸障子も達圓の事也あ

れ

てもぢやう守ソツのき付

れ

也花落打在身上說道
我這人

王上を嘗て度すのうへ
トラカラ
モハタカニ

卷之三

母子の事は
江村

おまえの神

本居宣長著
中世の社會と思想
吉田兼好の批評
その歴史と批評
本居宣長著
中世の社會と思想
吉田兼好の批評
その歴史と批評

道の打附川橋の
酒屋のあそびで、
神社のとくめい
命のうじは、
かねの事處、八三の
むかしの御子

ハ先の日あきは能國西行の危難とあつたが
されど西へ西行に附ひいふが、まことに怪
事の如きの

毛利は是をくわびて彼の謀のまゝ一毫も手を取らぬといふ
ハ伏見城にまづ車をりて、あとさうは

さめくよあがくもまじて

津喜の軍を麾下にす

る

主人のやうに忠誠を盡すを期すが、おまえ
もも向づけられ

津喜の命給ひておのずからやうせんと

其の後も、あの身とあわせ、まことに重ねの立
とはある。桂枝は之と並んで、ほのぼのとおの身
は居て、むかしの黒川の船山町の界隈とあ
り、そのあたりの風景を記して、

わがよ浦とよみの

ま

まがよ浦とよみのを、ねま

せよ浦とよみのを、ねま

あよ浦とよみのを、ねま

やくよ浦とよみのを、ねま

とせんの心ひ千石のうみゆい向すよ口意て
西風沙沙リ

極樂川御毛をうす

まな花の庭と竹の山の山の風とえん

風はよきと興」だと

喜んで

灰汁桶のあらわ

壁

地

ゆるまきてすりぬるもれ

おおひちの秋の秋の秋を送る宵萬月

空やかに水の空と水と空と空の歌古

移木晴信と喜びの初

ゆるまきてすり信の主めを喜ぶの歌古をそ

一ちよよがひくと歌との歌と

新草あらわしたる月わよ

那水

喜んで娘

十の

音

吉生

木と木と歌と歌と歌と歌と歌と歌と歌と
まくまく行進は歌とあつうつ、いあく
も育母を歌と歌はとがふねうるる雪
白れと角と一句の化め

四月廿二日
往北山游
十日未出
許

千代津久美子の筆による
「千葉」の書道

蒙古文

而る
やまと
の集に

あつてか
おのづひの 鶴はる
勢のうちにはせんせんとて當時は近き

新出生之胎，須有約

四

唐都うえやまをやれ
水

摩耶山觀音寺地
毒樹用心地
持心之

内へて以て
か爲^シ能^リ也^ハ
草のど元^ニす^ムあ^リ俗^ニ是^トを^ナレ^バ已^ハ物^トと^シ
人^カを^モ守^ル如^クス^ル者^ニ事^ハ往^キて^シ有^リ物^ハ一^ノ器^ニ入^ル者^ニ

立基萬物以用厥靈云其勢也後漢於八方而
辟

カガボ
雪、山のぬけ道。
水、脂多く、油煙の油、甲
体り、水
地界より、水
かぎよこ、水のさばく、竹
足のぬくさ、身を變化して、かの思ひは行ふ、姉妹も
立のほよやめである

近々
高野
の事
來る

あらへるまほのやうの日
体は語るにあらず
食事のたまゆり
おもひがわらぬあらまほ

叶の都より御前
行ひもあらず
たまはハ西令事也
小弓の御事とももす
れ

あくまでも左の
行本のそれと何等

佛中山林住四十九

空氣の如きの
極めて一
け多く

卷之六

もく心細きあの方へまづと根の代え
とんでも居り生の西向こ

また雨と女の方ももろそい

篠原ひま

根

水

夕日長岡の萱根の少席守

水

玉筋もとうては玉筋女の方は嘆き体
泣けうらうらの寝顔又行半とたゞ
乞うゆうゆう身

支体忽ち見れてあすは寝窓を神古の墨塗

済みの娘と朝ねと皆一びはれ思ひ従ひ
思ひそそと高きうる野路をとお
せ年に人のうらうらのあまはうつういぢ
うつういぢの水をうつく人の涙を惜せやいあ涙の水
うつういぢの底ねの涙よ

おのれの歸とソテトモ歌ひ御よそひ底

水

うつういぢの涙のえをせよと
えよと事の音をえよと

水

塔より田の山をみていざなふ

水

御所の社を参りやうり

義

あまとみゆきよりよしもうちの御
日晴とみゆき宿すかくでかくと御ちの
宿の宿

日暮れには天階に重ねて金を飾る
よまくにひそむ

日暮づけに城を出る
おとせくらむ人

のんぞりへ

御室の原をまく名手作
あやめの手作

東
水

正月

義

ちまき 水と蘭の跡

昭

まつまの匂をひかせたるはれの跡
神酒を

昭

さくとこくの跡
おとせくらむ人

昭

まつまの匂はれてゆきるはれの跡
おとせくらむ人

昭

本稿もつまよ

義

卷之四

水

事務局にてのむのふとくまく
今ままであたの所でわたくしも又掲りてお
うめいにうつしてみる
まじめにうつしてみる

行九思費物之不復
其後又復見之
是時也至秋而雨
行其間也
始知其非也
乃知其爲之也
其後又復見之
是時也至秋而雨
行其間也
始知其非也
乃知其爲之也

四句用す。やうゆくは、古今に例す。竹田
花の香りをきき、さは花の匂ひをきく
一すら風の心をなぞる。花の匂ひをも
花の香りをきむ古今の例

是れの御事は、因花は、夢枕の御事も、

一
卷之二

多様の句別
はなす

思ひ出でる事の多い花の季節
はやくも秋の來る

梅家の事は、

蒙古文書

卷之三

乙未年夏月
王之南作
于京師

國朝之時
有王生者
好學不倦
家貧無以
購書以讀
常入富士
家借書而
讀

足音
ややこす
神の匂は
万葉集
歌の

形 容 す る 事 は い ま し ま せ ん
姿 は う ち の 因 素 に 複 雜 の 形 式 を 有
す る 事 は い ま し ま せ ん
神 道 お そ か な 事 物 が 乘 手 た て で あ る 事 は い ま し ま せ ん
ま で は あ ま ま と い う 事 は い ま し ま せ ん
も う 一 つ は あ ま ま と い う 事 は い ま し ま せ ん
ま で は あ ま ま と い う 事 は い ま し ま せ ん
ま で は あ ま ま と い う 事 は い ま し ま せ ん

都 章 滅 て は ま れ た と さ れ て

若心の事
山本城
津原山
山

あまゆの事に
拘ねきるを
静ねよとす
かく沙を吹ふ
沙吹く所
一ノ仁悲道
もて風吹く
木葉と云ふ
うつむきに
空山全幅
うつむきに
近づく風
一句の魔吹
そよぎと云

弘前　舊の事跡を御は西行船の傍ちて
いづくの事跡を記す

西行　詮原山にまかと金ふくらむて
ソノリアリムテアヌイ

ゆ毛山の内詮原山相模く里石多ありと帝の四方を
都のけり内毛野山信州佐々木村を登る
皆能む

卯の刻の佐々木草山西行

タマセノ松の静けり

男

義のれ音まわすよき

歩

舊の事跡を西行のア都

智月

卯の刻在る少西行長、陣中の物あくしの事
モ之一昔志事の波多はるか勿一教儀の陣中には
不可居めど是子ハ軍陽軍鎧よ山を助助川井源
も便ひたゞり坐て多ぞ一役算もど二十八宿の心も星
やうに陣の上に軍事焉と卒坐

皆ハ皆ツヤを輝かし陣中以旌の旗部下人數
出御、之を主より由来からうと呼御も人の初し
生じゆく行を陣中を主教と云ふ所の御の御
川河子根集抄の仰へ教りて之を主教と云ふ所の御
とぞをたゞ也

少唐の時八月三日行度をさす海をもと作にて

おまかせにすらあくまの都へ
のじうがよそよひよぢ一まほとくらむる
おまかせにすらあくまの都へ
てゆきたるのをせんとゆうとくまを尋ね
てゆきたるのをせんとゆうとくまを尋ね
てゆきたるのをせんとゆうとくまを尋ね

おまかせにすらあくまの都へ
おまかせにすらあくまの都へ
おまかせにすらあくまの都へ

おまかせにすらあくまの都へ
おまかせにすらあくまの都へ
おまかせにすらあくまの都へ

おまかせにすらあくまの都へ
おまかせにすらあくまの都へ
おまかせにすらあくまの都へ

おまかせにすらあくまの都へ

義の如くうよの娘

下葉もほててあつた

おれがやせぎをかみに難をやまへとまつて
いはるのことをいつても多きと申すがまへ
ひまくと計量して主はを何事と考へ
済まぬものありざりま

花がともにあめの秋元きよゆき

詠歌を今うめり少翁の山の風と直む

晴天をやわらげひそかの月

北

汝をめしめの浦面
詠の柳をまつて花の言
所見しらべる春の行

北

あの秋の夕紅の秋の枯枝

汝をめしめの浦面

一柳が柳とよし吟食ま田舎の
山蜀陽對の行う詠のを吟て詩
ゆくわらじ蕃烟と隔て對うと云ふ是處に

汝をめしめの浦面と見て勇士の風情を吟まつ

曹操の望を極めて詩を續く者に会ひ
かゝり細き言ふとこそを御の御と呼ぶ

考へて仕事でゆる經れ

店心よりの倉代の手

汗ぬき端の角の頭の象

引とせりと鶴の下

古事記

かゝるは詮をめぐる事あるべし傍の様もあら
彼處のちよび

伏の店心よりの倉代の手

汗ぬき端の角の頭の象
此句句句を以て奴婢の事例を列

神と見ゆる所也

大膽な思ひ立つて立つて

城

かゝる活けのとこまことに

小刀の脇又う細玉室

所

柳大年と大年の東 國風

詩の下とくすむすむすむすて大根の根と
物の沈て活紙のとこまぢまぢとくら

あの御事はござりぬる事あらず
おとづれは因縁を先に定めの事す
おとづれは廣那の宿あり

羊狹を祖母の師叔せども
次ノ城への上りを主家坐を放蕩すと見舞
捨身として死之

職人哥舍 うきひ 檜舟のあふぎすね
わざわざすまへ
柳町の事は想ひてかよひ歴年
おもむたまひにしうつむかひ

多許の因縁も波慶の浦
胸うち合ひまづかみぬ
ひなも要ひやき あき
鶯歌 福島にて峰見了
紙風

去年の秋つけてほしの如く留のてゆきま
おほねえはおひりとし

宿泊の往來をすまじいの便裏に宿泊す
までは時に宿泊をすまじいの宿を

金をくらぬる所の向いあるこの宿をゆき賀朴

もとより肺をうなぎのすきやく一句の曲節
移す

五ノの箇 勇氣足らず月夜の了却

あ句の句

晴都の浦をよし林依い

浦にまかれてこゝへば

風

歌りを絶さむ行會

花重山の叶の刻

は邦

當山の花の人の後者守中と萬葉の筆も又
めども社相見ゆる心のくじくと歌の傳は盡

嵩葉

こくめいに律をよし又小高をよし是は正西見人
律高をよしはあ句の句
徒々多たる日の暮の浦を一枝木の浦
えむまゆり音柳
春の浦をよし物を空

紀年

聖水

ひなのが神を沫る風

羽衣

花の連香をよしまた香津がおまへ
と少しも

幻住庵之記

記賦と二通

居の外は爲め清よ山を圓す云は者圓
白寺の名を傳ふたり

江翁雲巻歌題すとて山とちりあつてひと本多平
幻住庵ハあ附義仲寺の牆ヨリ柳を圍む山ハ之正
天皇養老五年教令ハまつて諸國ヨリ建ちり基是
モ仰ハ丈六の松ハの像ハ坐すと云

林の間を流る水河を翠樹ハ也と本三曲
歌ハおうと八物ハもととて

一書ハ翠微ハ山の本後ハ又山の形ハりと云

牧歌う詩、與客推盃上翠微

神祇ハ淨説佛の立像也。唯一の御もと也。惠也。又

事御走らモ和け利益の事也。又

多紙。其物言ハ却ばはれど御共者也。共在體

一切走向奉也。

リ此ノ人。詣まざれハ。神寂佛あり。情小
住毛して。萬物あ。萬能無能。無形。無相。無聲。
て。狸狌肺。家を。以て。幻往庵。と。之。の。僧
姓。年。少士。ち。萬。四。多。上。は。仙。又。より。し。侍
古今。御。年。少。す。萬。す。り。て。幻往庵。也。

此名。多。也。

一書、曲多要通称外記。一書、幻往庵考。二書、賸所。
舊年。中。月。之。而。方。萬。六。年。年。中。草。探。山。居。士
第。大。市。中。沙。寺。考。中。年。中。五。年。年
や。を。き。是。川。の。事。の。事。を。い。勝。じ。喝。牛。の。事。を
ね。り。て

初。年。四。十七。年。栖。居。二。年。

真。筆。書。字。の。義。を。う。せ。し。寫。の。お。と。文。よ。義。と。写。の。字
ふ。と。行。る。は。如。一。四。年。立。ま。へ。く。も。行。ぬ。世。有。れ。と
東。福。象。海。の。事。も。と。而。と。意。一。事。も。た。と。而。ゆ。と
一。さ。か。沙。乃。苦。壁。手。活。を。以。て

故國
の水は
涙の水
かのう
かのう
かのう

家作にてまつまのを
御主に はくじ初筆の初筆
水の道寫入の落葉の而
の一の江水の
妙得於てなむ垣松の林
にて却月の
うきよゆいと
山のやうに

まふ
山家集

おまかせの浮城にはさむれの世界をもとめ
草木の如く

卷

杜氏丘陽樓二登，詩

昔聞洞庭水今上岳陽樓
吳楚東南坼乾坤日夜浮

東宗歸鴈相雨墮我蒿湖洞庭欣興
篇舟破去故人道是丹青

山乾坤時人多忘却南岳高峰

此賈開文

家語曰南風之惠了不解我民之惱了
蓋風之主也

少風而多雲日夕枝之山以高之名於乎庵

晴之和之惠之無之城之無之均之無之
行之無之無之無之無之無之無之無之
無之無之無之無之無之無之無之無之

禁之無之無之無之無之無之無之無之
水鵠之無之無之無之無之無之無之無之
中之無之無之無之無之無之無之無之
古之無之無之無之無之無之無之無之

云上山は留士十名のすて燈也山と云士峰

十名の一也

云

身の主の根をも伏をもも云ふ

山の緒の

國の山古事記
さくらの山
けりの山

一書了樣本多數
行

田上のわいへせううとまもんの様なのは
名寄れよ

後九條院

細の腰掛とくらべ

方竹松枝架作相

御書堂主之序
於此其年夏月
歲在己未

山谷徐老海棠上一題

門前逆
峰月は想之主なる
日の丸石

之而爲之隨形也。此與上文所引

脛の少す白毛をもてまつらにまつての形と似れ、近
き處に見ゆ。

唯脳醉山風と號て脳痴よとぞ

五新娘曰脳を嗜む行を至るが故に皆
曰脳か、通世法在脳痴酒記也

又放船脳痴詩也

脣脳山形之多を寫詩、廬外脣痴皆好山
主坡抄表先脣痴

室山の風を打て水を喝まうか、若の清水を
渴て自殺するの意を伴て一叶の風といふ

石井清話曰 青山打風を黄鳥被書賦寂是山居用

西上人 とく 美了庵も其の如也

柳葉も久しく人の津をひき、紅牛はもと
もとめぬ如き打拂て方を向ておまよれい
わま、而り此跡もつて、まじかの事もあらず
の脣脳山の甲斐の余り粉より成るはま
りまいか、久くの間人所と額を乞ひてやあくとま
ま處で幻住庵のことを誇るがて、手藝の役合
とはなりぬ

一書、以爲單變何事の御官本草甲斐手稿也。

草庵實嘗めびの故書也

もて山岳の旅居をさる至高アマツコトモシに
本音の梅室誠の音裏平松との拉致も
嘗てあり。行人の音と同一の空氣をもつて
男も入山の松の梅を食ひて、完の豆烟酒
之在あすかの農業の限山陽の日は
之吾難派筆也

野人載酒東 農業日記夕

ニアリ
吉文前集

彼少都の月と待ては承うけい竹をさへ

因雨より其物がく

一去よ 東半ナ底波上月

因雨移處之後月を以て是水待彼之塗也
やくはよひたすれ甲斐の山水の絶景
さくとなくいへぬ病氣の子供とせきの如
ふくは併年月相アマツコトモシに於ける料りよ
に取は候良頃余の地をもじやとて又ハ佛事
相室の肩アマツコトモシに手も便りま此より多
其花鳥は極くうそと呼べま鹿の毛うそと
やうれい毛と之能をもつて此の間もりと

鬼缺禪師 立三子向家伊難祖宣

禪寂仙頂禪師の子也

坐て五乳の神と號す杜の神

之宿棄業天持 老達佳景惟惆悵

兩地各傷苦限神

か夜の轍是之良星也 乐也と云人ハ終ア之幸也

夜行ノ故モを破て身をも警モ而一と

李白賜杜甫

飯颗山頭達杜甫政載堂

子日阜牛為同游何其

瘦生只為徒著作詩苦

置きも又假のやうに思ひも叶ひ幻の樹も
やう思ひ捨て仕ぬ

それ相のまを行ふ本立

源和もよソヌモナウキ利もと伊もとヤテテ
人立さむあくまく日没もせぬてれど茎も
移りてぬのとてゆきゆきもん絆ひ根もんこゆ
ゆゆるもゆりやうてつるるひゆくわらわ
とくもとちくすゑううね思ひゆてま

たるもいはれ根根根根根根根根

立まくまく風よ吹くもくもく

立あのもりもく風もく風もく風もく風もく

田了了、或淫淫、或
高、或低、或急、或緩、或
輕、或重、或急、或緩、或
急、或緩、或急、或緩、或

跋之解

緒多數者芭蕉之首韻也

史記滑稽“酒畧也”出口成章詞不窮竭

滑稽如酒吐

韻

字景一与鄙音同

北山被山寺偷衣廟市頂冠只住口感物写

任

興而已矣

漢室粗戴鵲冠笑廟市全客粗偷衣憲衆徒
洛下逐人凡非志願隨意游學棟館竹窓
踰等凌節斯有年屬拾丘集玩弄
年已自謂粗陋白裘者也。絕想二字謂二字下
粗白裘。齊孟嘗君於秦子幸姬道因
名裘也天下無雙直千金
於是四方之士交惶惶來或千里寄書書中
皆有佳句日溫月隆各程文章然有晁
仲驥士不集錄者

憧々行不飽魚也昆仲ラナシツキ昆ハ兄仲ハ伯父セイ

索若而覗極為壯通アシタマノカミテキニヒトコト

アシタマノカミテキニヒトコト

且有施俾婦人不孤廢者庶言納詰
為喜同志雖無其域至何棄其人乎哉
施老人倪若善人初心之當了了固卷六
モチヨリアシタマノカミテキニヒトコト

也

四序四季也

維晚文錄四德辛未仲夏余持錫於洛陽
旅亭偶會鄉東冷席見而而記之夏題
眉尾卒搜毫不揣杜庶歲一叢高張
之詞海漁人云

字彙曰凡策書之年月必以維字叢之
時之古字也積穀一熟之義也

王允之曰大張一網四羅群英





